

今から五十余年前、私は新米巡査として兵庫県尼崎市内の某署へ配属された。神崎川を境界に大阪市と東西に分かれるこの街は、阪神工業地帯を形成していた。

昭和四十年代の初期は、景気は昇り口にさしかかった時で若者の働き先は十分にあり、街は活気に溢れていた。世の中は、音をたてて動いていた気がする。当時は年末には「年末警戒」と称して、警察、消防、自治会、婦人会等が協力して、夜間の警戒活動をしていた。警察は、要点五番として前半夜が午後六時から午後十時まで、後半夜が午後十時から翌午前二時まで「地獄の五番」と言っていた。

それも人や車の頻繁に通る場所なら、風も温かく、景色も変わるから気分も紛れる。

その年、後半夜の五番に大阪市との境界にある神崎橋西詰の配置となった。

その日は殊の外厳しい寒波で、雪が舞う夜だった。配置に着いたその時、六十歳代の婦人が雪の積もる傘をさし、懐中電灯を照らして近寄り「寒いでしょう。風邪をひかない様にごんばって下さい。」と優しい言葉を添えた小さなポットと、新聞紙に包んだ焼いもを差入れてくれた。私は婦人の振舞に思わず郷里の母を思い出し涙が出る程嬉しく、何度も礼を言った。誰も通らない深夜の河川敷は、風が低く横に吹く。さっそく橋の欄干の陰に跪きポットを開けると、それは熱い生姜湯だった。両手で包み、コップの淵を口に啜ると五臓六腑に染み渡り、体の芯まで温まり生きる幸福を感じた。新聞紙に包んだ焼いもは、懐に隠して暖を取った。

これまで、多くの人と関わり多くの親切をもらった人生だったが、どれだけ返すことができただろうか。今七五年の年輪を教えたが何人から「ありがとう」を言われただろうか。小さな親切ならまだ間にあう。優しいことばを添えて贈りたい。